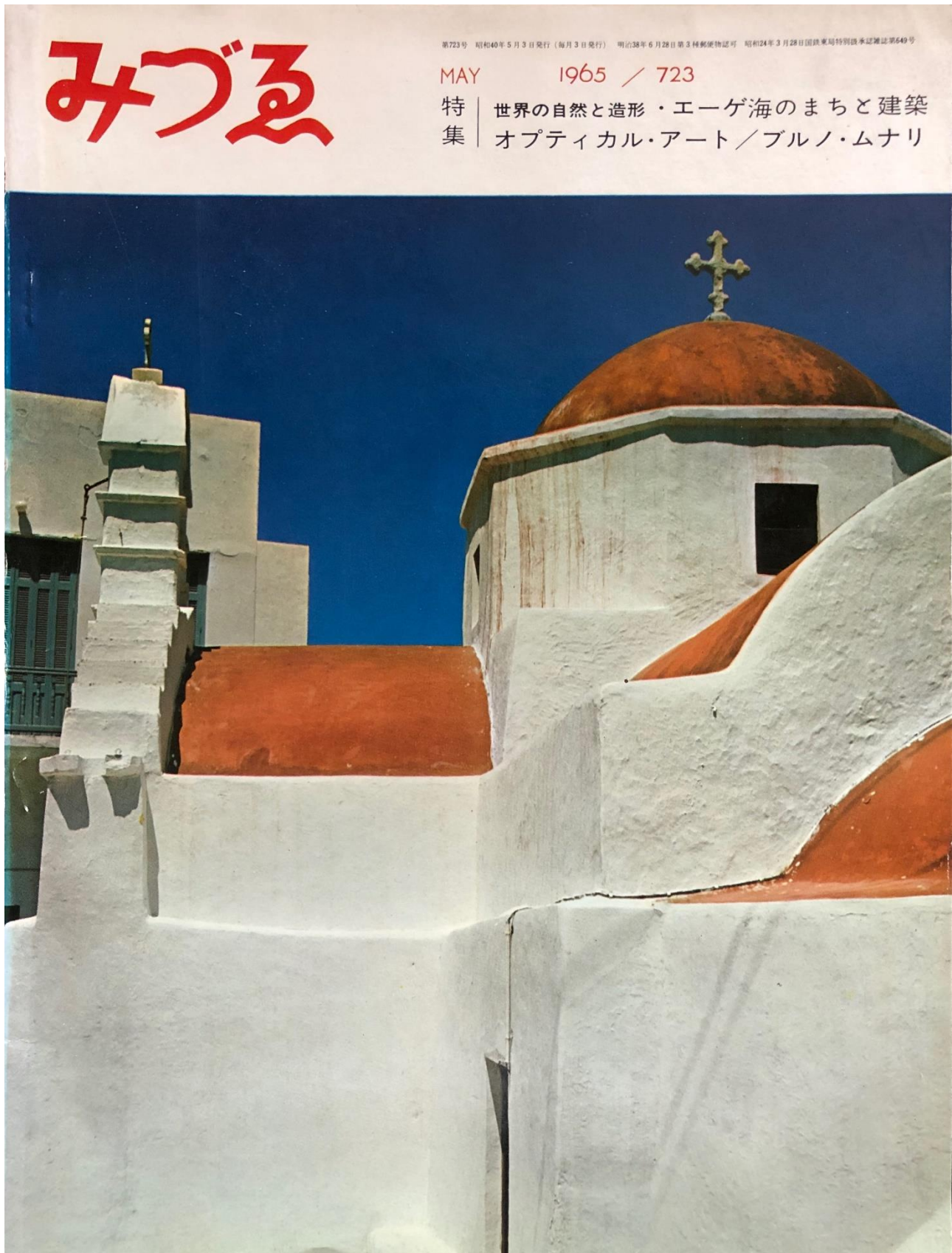


Mizue - A Monthly review of Fine Arts, n. 723, May 1965 Tokyo



みづる

No. 723

MAY 1965

目次

特集

世界の自然と造形・エーゲ海のまちと建築

フェルナンデス・アルマン

アメリカ現代美術の展望

原色版

ミコノスの道	2	撮影：二川幸夫
鉄器類・系図学	27	アルマン
カロタ	41	ヴァザリリー
オーケストラA	59	三岸好太郎
作品	69	ネル・ヴァルデン
モンマルトル	75	大久保 泰
念	93	権 玉淵
春	95	仲田好江

グラビヤ版

エーゲ海のまちと建築	3	撮影：二川幸夫
アルマンの作品	29	ゴルゴンヌの楯 他
ムナーリの作品	51	旅行のための彫刻 他
三岸好太郎の作品	61	黄服少女 他
西洋の古地図	77	ミュンスター 他
《フォート・インタビュ》細川宗英	85	撮影：酒井啓之

本文

《世界の自然と造形4》エーゲ海のまちと建築	19	磯崎 新
《今日の異色作家たち5》アルマン	24	日向あき子
《アメリカ現代美術の展望I》抽象表現主義以後	39	村木 明
ルドンの手紙・ルドンへの手紙(最終回)	44	栗津則雄
ボンジョルノ・ムナーリ	50	山口勝弘
三岸好太郎のデビューと北海道	56	匠 秀夫
「嵐派」運動の回想1	66	仲田定之助
海外雑誌記帖	72	山沢章一
美術界展望	74	松岡寿衛
美術夜話	82	布留海児
細川宗英の空間解釈	84	桑原住雄
作家の発言	89	細川宗英
画廊から	91	植村鷹千代

表紙

エーゲの教会	撮影：二川幸夫
目次カット	シャガール



編集発行人：大下正男 本文印刷：大日本印刷株式会社 表紙・原色版：株式会社光村原色版印刷所 グラビヤ版：東京グラビヤ印刷株式会社 発行所：株式会社美術出版社 東京都新宿区市谷本村町15 電話：(260)2151(代表) 振替：東京166700 ￥480 昭和40年5月3日発行 1年分概算 ￥5760

mizue

A Monthly Review of the Fine Arts: Founded In 1905

Number 723, May, 1965

Price Outside Japan. U.S. \$23.00 per year: U.S. \$2.30 per issue

IN THIS ISSUE: SELECTIVE SUMMARY OF THE CONTENTS

ARMAND

Armand's entrance into the world of 'objet' began in 1954 with rubber stamp painting. This is the period when he created a number of works using rubber stamps or other patterns cut out of felt hat or shoes which he impressed on the canvas. After this, following a period in which he threw ink-steeped pebbles, bolts and other objects at the canvas, trying to capture their marks and incidental patterns, he entered the period of rage. The group of works in this period are colored light bulbs smashed to pieces on a board, or violins, cellos and other musical instruments broken into pieces or cut up and scattered over the canvas. Here the element of painting gives place to an almost genuine 'objet.' The challenging attitude to eternalize time and explosive moment conveys an atmosphere of decisive tension to the canvas. Although they are action-paintings by 'objet,' still they are a series of works most expressive of all his creations.

However, the most characteristic of Armand's works, or those with 'post-Pollock' themes would be found in the later accumulation and 'assemblage' works. The artist's interest is turned toward what can be called the stratigraphy of society in the age of mass production. The Cult of Mass expressed in an assemblage of used electric shavers, dolls and waste paper; an accumulation of pistols, irons and other wastes: these may have significance not as an expression but rather as suggestive of the inevitable fossilized reality filled with dead objects, or its recognition. In a word, he makes an announcement, by the presentation of a problem situation more fundamental than art (Noonday tragedy), that, willy nilly, we have entered, not the modern age, but the monstrous "today."

Text by Akiko Hyuga (pp. 24-38)

PHOTO INTERVIEW: Munehide Hosokawa

Munehide Hosokawa was born in Suwa City, Nagano Prefecture, in 1930. He was graduated from Tokyo Arts Academy in 1956, majoring in sculpture, finished Special Sculpture Course in the same academy in 1956 and was made an assistant there in 1958. In the same year he became member of Shin-Seisaku-Kyokai. In 1959 he went to Vienna via Moscow as a delegate to "Peace and Friendship Festival." In 1965 he was awarded Takamura Kōtarō Prize. His works have been exhibited in various exhibitions including International Exhibition, Gendai-ten, Shusaku-ten, International Concrete School Exhibition, Fifteen Avant-Garde Artists Exhibition and Shuro-kai Exhibition. (pp. 84-90)

NEXT ISSUE: Space of road, A. Calder, Klimt and Schile, etc.

PRESIDENT: Oshita, Masao

EXECUTIVE DIRECTOR: Oshita, Atsushi

BUSINESS MANAGER: Miura, Atsushi

EXECUTIVE EDITOR: Ikuo, Keitaro

SENIOR EDITOR: Moriguchi, Akira

STAFF PHOTOGRAPHER: Sakai, Yoshiyuki

RECOLLECTIONS OF THE ARTISTIC MOVEMENT OF "DER STRUM" (1) By Teinosuke Nakada

The second decade of the twentieth century saw the rise of Futurism in Italy, Cubism in France and Expressionism in Germany. The name of Hervarth Walden, the great driving force that led to victory these numerous movements of modern arts arising in Europe, should be long remembered, together with the name of "Der Strum."

The present age hardly recognizes the contribution of Walden who never spared himself in his efforts at discovering, encouraging and rearing many promising young artists within the revolutionary "Der Strum" group which spread New Art Movement throughout Europe.

Walden who dug out Chagall when he was an unknown young artist, and who recognized the artistic gift of Kokoschka long before others did, published such magazines, as "Der Komet," "Morgen" and "Der Neue Weg," to promote the Expressionism movement and firmly established the artistic evaluation of Expressionism.

"Der Strum," along with "Blue Reiter," was an artistic storm that swept all over Europe. The author recollects his experience of this storm and vividly describes its rises and falls with the use of abundant data. The author is an art critic. (pp. 66-71)

REDON'S LETTERS; LETTERS TO REDON

Almost simultaneous with this discovery of color in painting, a subtle change shows itself in the letters he wrote. This is explained by his reconciliation with Nature which had stood as his opponent and forced him to shut himself up. This reconciliation was not a mere compromise with Nature, but something that required a subtle technique of approaching and withdrawing from Nature at the same time, which gave him a unique place that was neither Cubism nor Surrealism. With the outbreak of the first world war, his son Ari was drafted into the army. Although Redon was glad that his son was given the unique opportunity of experiencing a war, yet this great war which was incomparable in scale and misery to Franco-Prussian War he himself had experienced gradually enervated him and he came to despair in the folly of this man-beast. On July 6, 1916 he took to bed from an illness which had started as a cold and he passed away without witnessing the end of the hideous monster called war.

Text by Norio Awazu (pp. 44-49)

COVER: Photo by Yukio Futagawa

Translated by Shimasaki, Chifumi

PUBLISHED by
BIJUTSU SHUPPAN-SHA,
15, Ichigaya Honmura-cho
Shinjuku-ku, Tokyo, Japan



Bongiorno! Bruno Munari

—ムナリー展を機に—

山口 勝 弘

今日はブルーノ・ムナリー。この間の東京の個展は大成功でしたね。オメデトウ。もう貴方はミラノよりも、東京でのほうが有名なのではないでしょうか。こんど、日本で最も立派な美術の雑誌が、貴方の作品を紹介し、そして僕がその記事をかくのを頼まれました。

批評家でもない僕が、貴方の仕事について書くのは困ったことだと思いました。日本の諺言に「百聞は一見にしかず」というのがありますが、文章のかわりに、貴方の作品の写真をもっとふやしたほうが、いいのではないかとも思いましたし、また「読めない本」などをお作りになっている貴方のことだから、退屈な解説など必要ないという僕の考えに、きっと賛成されるだろうとも思いました。ところが、貴方の作品は、見るだけでなしに、手で組合せを作ったり、動くものがあります。

それに、限られた雑誌の頁の中に入りきれないほど多種多様な作品があります。そして一番残念だったことは、あの「水の滴る泉」の大変微妙な水滴の波紋が、写真の上に撮しとることができなかったことです。そして、そういった幾つかの理由から、文章によって写真で伝えられない貴方の仕事の波紋を、日本の読者の心に伝えることに決めました。貴方の「水の滴る泉」のように、歪みなく貴方の仕事の内容を伝えることができるかどうか——

ブルーノ・ムナリーは1960年、東京で開かれた世界デザイン会議の時に来日し、こんどで2度目の日本訪問である。そして新宿の伊勢丹で3月25日から31日まで個展を開いた。

彼が、彫刻家であるか、画家であるか、デザイナーであるかということを考えるよりも、その個展の時の出品目録をみたほうが早いだろう。

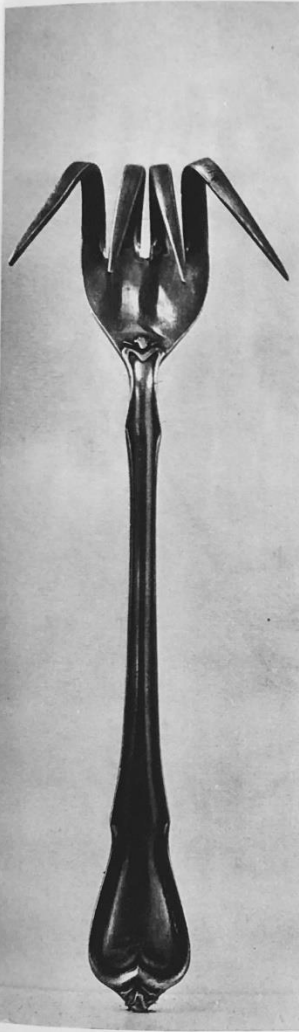
灰皿2種、フロア用灰皿2種、吊ランプ3種、卓上ランプ、キャンドル・スタンド、紙製くず入れ、コンポート5種、硝子容器、時計、飾棚、額縁2種、彫刻用円盤、直接投影セット、フレーム、プラスチックボール2種、タバコ入れ、ゴム製ABCの造形、印刷セット、〈展示品〉水の滴る泉、投影の芸術、ボラロイド、くぐる絵本、〈本〉アルファベット、グッド・デザイン、芸術についての定理、正方形、円、フォーク、暗い

夜に、身振り。

これでも分るように、ムナリーは、造形の一分野で仕事をすゝる、従来の画家や彫刻家や分業化した各種のデザイナーのどの枠にも入らないのである。かといって、注文に応じて流行に合わせたデザインを売っているアメリカのデザイナーともちがう。滝口修造が彼の個展のカatalogに、「大げさなレットルと分業化の時代に、その仕事はいわば絵本から灰皿までといわれるような振幅をもっている。しかしムナリーのほんとうの面目は、そうした変化すべてに独自の明快な造形精神が躍如としていところにある」そして「かれのめざしているのは、ひとくにいえば、固定した、権威主義の重たい芸術よりも、開かれた、動きのある、軽みをもった芸術なのであろう」と書いているが、ここで面白いのはムナリーの作品の場合、固定したといひ重たいといった場合、観念的にそういう性質を否定しているだけでなく、物理的に、実際に、軽くて動きがあるのである。

彼の彫刻で、石や、木や、鉄の塊からできているのではない。例えば、アルミニウムや木の薄い板や、色のついた一枚の紙でできている。しかも、アルミニウムの場合は、何枚かの板のピースに切目が入っていて、これらのピースを自由に組合せて立体を組立てるようになっている。また、木の場合や紙の場合も、簡単に折たためるようになっている。

この折りたためる紙の作品に、彼は「旅行用の彫刻」という名前をつけているが、旅行用の彫刻といへば、ダダイストのマールセル・デュシャンの作品にも同じ名前のものがあつた。デュシャンの旅行用彫刻は、薄いゴムの切端しで、それはどこへでもぶら下げられるようになっている。デュシャンの場合は、ダダイストとして既成の権威主義の芸術を否定するために、レディ・メイドのオブジェを彫刻と名付けたり、こういうゴムの切端



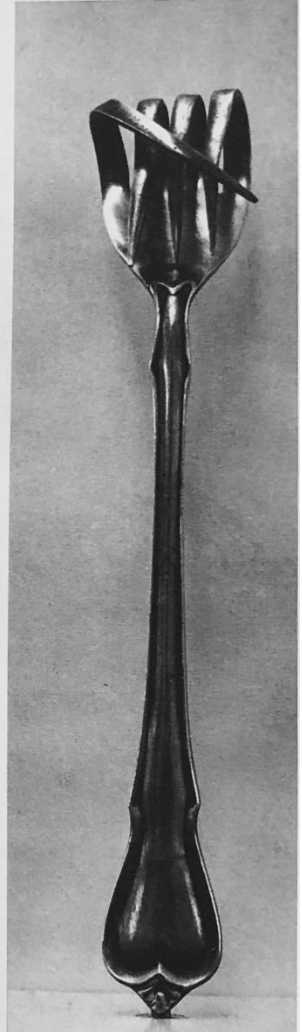
怒り ira



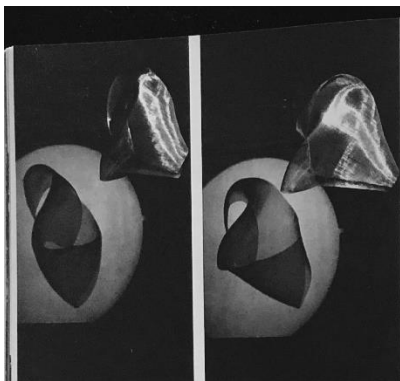
自由 liberty



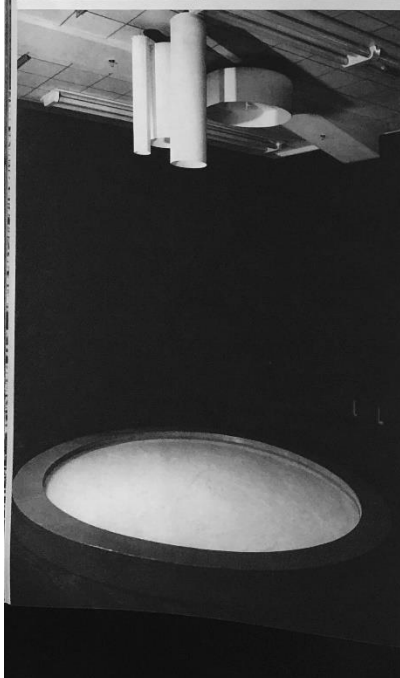
O.K



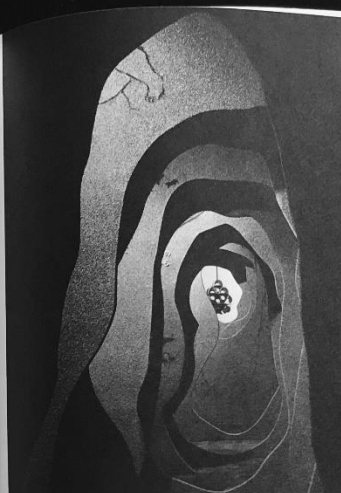
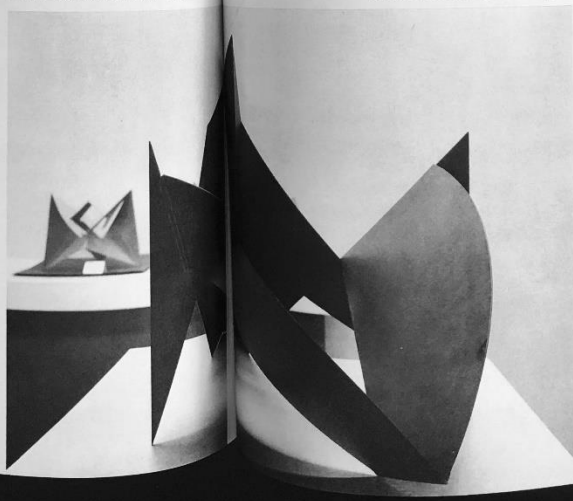
いえ結構 no grazie



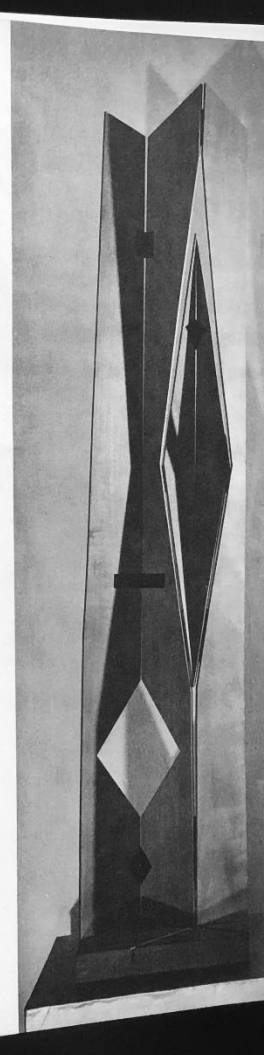
左：投影の芸術 Concavo, Convesso.

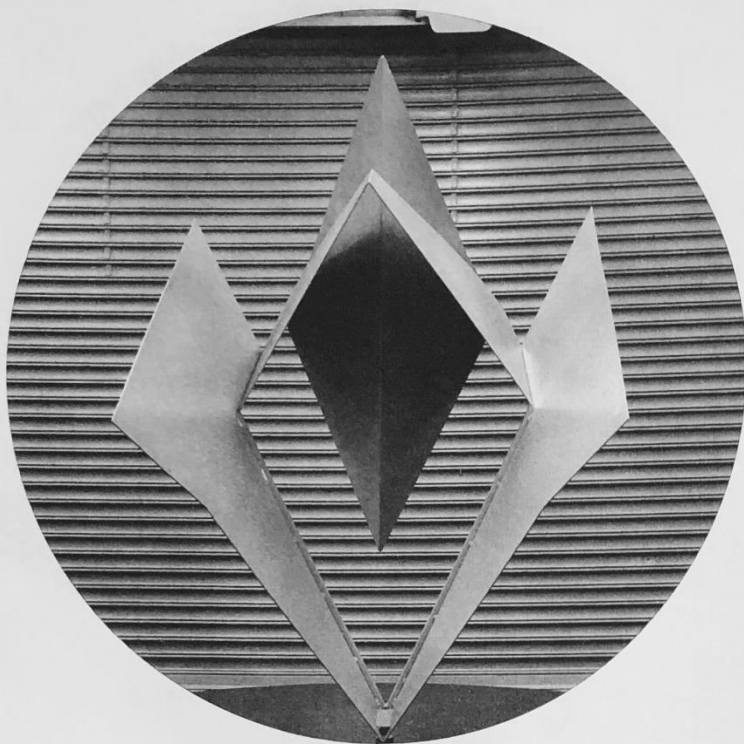


左：水の滴を象 left: Fantana di Gocce di Acqua.
下：折りたたむための彫刻 Scultura da Viaggio.

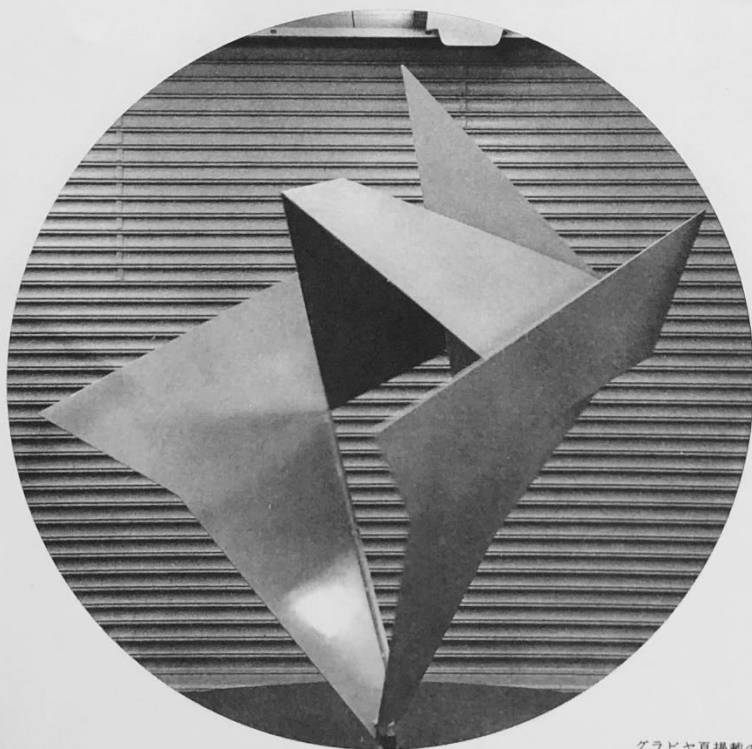


上：くくる箱本 above: Nella notte Buia.
右：旅行のための彫刻 Scultura da Viaggio.





まわる彫刻 Scultura da Viaggio.



どうぞ Prego



グラビヤ頁掲載の作品は東京新宿伊勢丹「ブルーノ・ムナリー展」(3.25-31)より

しを彫刻といたりしている反面、デュシャンの思想や仕事の中にあつたあつた痛烈な風刺や遊びの精神が、時にはダダイストとしての権威づけの中に格付けされてしまう傾向がある。

しかし少し視点をかえて人間の造形活動という点からみれば、デュシャンの「ロート・レリーフ」や「回転半球」や映画の実験などは、過去の芸術の否定という意味よりも、将来の芸術への道をひらいたという意味にとって、ダダイストとして神格化されている彼を、もっと自由に考えてもいいのではないか。そして、デュシャンのこれら一連の仕事は、ムナリーが、自由な造形活動の上で探求しているものと、全くちがうようでいて、意外に近い関係を結んでいるようにも思える。ことに、芸術の伝達という問題について、この2人は非常に近い考えの上にたっている。たとえば、作者の手元で完成された一つしかない芸術作品というものに対して、2人はそれぞれの流儀で反対している。デュシャンが、レディ・メイドのオブジェをとりあげたとき、同時に何百何千という同じシャベルや自転車の車輪が、オブジェとして意味を与えられたこと、ムナリーが一定の法則によって曲げた金網の彫刻を発表すると同時に、同じ金網の彫刻が地球上に何百何千と存在しようということとの間には、今までにはなかった芸術の伝達についての考えが共通してみられる。またデュシャンの印刷されたロート・レリーフが、誰の手元においても、あの不思議な視覚的な錯覚の面白さを与えるように、ムナリーの組立て彫刻は、誰の手元でも、自分でいろいろな組合わせの立体をつくることのできる。

つまり、作者の手元で完成された作品を、一方的に観賞者の前におしつけがましく提出しないで、むしろ受取る側の人たちの積極的な参加によって、芸術の伝達を成立させようということに、この2人の造形精神の方向がある。しかも、多少のニュアンスのちがいがあつたが、遊戯や笑いや悪戯をとまなっていることも忘れてはならない点だ。

ただ、ムナリーの場合は、デザインという方向からこういう領域を開拓している。読売新聞に寄稿した彼の文章に「現代の美術は大衆とのふれ合いを失っている。芸術家たちはますます孤立するばかりであり、彼らの使う言語は心得のあるごく少数の人たちにしか理解できない」「今日では、デザイナーが自分の仕事によって大衆との接触をとりもどそうと試みている。実際デザイナーは、自分自身の生活している社会が提出する要求に答えて、これらの問題を解決しようと努力している。できあ

がつた物が一貫していて、しかも機能（これには心理的な機能も含まれている）から見ても正確な形になるように追求される」と述べている。そしてイタリアにおけるデザインの方向は、「純粋な研究——すなわち、構造やパターンの追究、素材の試験、様式（スタイル）から独立した視覚的、形態的追究、運動している形態の追究（実験映画）——である。これらの追求のあるものから視覚的伝達をためす作品が生まれ、これらの作品は《プログラム・アーツ》（計画された芸術）という名前を得ている」と説明している。

この説明を読んだかぎりでは、かつてのパウハウスの理論と同じような内容におもわれるだろう。しかし、少なくともムナリーの作品をみたひとなら、とてもこんな理論づけがあるとはおもわないで、彼の自由闊達な造形精神の活動に目をみはるばかりだ。

彼の言葉にもあるように、「デザイナーは美を単純さのなかに詩を實踐のなかに、自然さを表現のなかに再発見する」。つまり彼は理論で朝が夜になり、冬が春になるということを一度も考えたことのない詩人だからである。

さて、最初の約束——写真の撮しとれなかった水滴の波紋のことを少し書きましょう。大変主観的な見方ですが、おゆるし下さい。実は、貴方のレセプションの日に、貴方の作ったオメガ社のPR映画の「時間」という映画の中で、ハイスピード・カメラがとらえたあの男のアクロバットの動きをみて、ちょうど週間前に、ソ連のヴォスホート2号から脱出して、人類最初の宇宙空間の浮泳をした男のことを思い出しました。推力約650万トンというエネルギーを使って宇宙を泳いだ男の動きと、ハイスピード・カメラで一瞬のうちにとらえられた箱から飛びあがつた男の動きが非常に似ているようにおもえるのです。そして、貴方のあの「水の滴る泉」の静かな波紋は、宇宙を泳ぐ人間にも、地球上を歩く人間にも、時間と生命についての瞑想的な静寂を心の中に呼びさますにちがいないと思いました。

そして、この種の静寂は、むかしから日本人が生活の中でみつめていたものであり、それを貴方がとらえて、あんなに単純な形で考えられるとは思ってもみませんでした。

それでは今後の御活躍を祈ります。

お元気で ブルーノ・ムナリー様

訂正 3月号722号「謎の銅版画家・ヘルキュレス・セイガース」中60頁右段21行目の「1680年代」は「1620年代」と訂正します。

菅野 陽